

# 『瀬戸内海言語図巻』少年層話者の 言語形成期以後の言語状況

——愛媛県松山市中島における追跡調査から——

友 定 賢 治

## 1 はじめに

言語変化研究において、実時間変化研究（change in real time）がさかんである。代表的なものを2つ挙げる。まず、国立国語研究所の山形県鶴岡市における調査がある。1950年・1971年・1991年・2011年と、20年おきに4回の調査を行っている。いずれも物資配給台帳や住民基本台帳などにもとづいて無作為に抽出されたサンプルを調査対象者としている。質問項目は、音韻・アクセント、語彙、文法などに関する「言語項目」と、言語行動と言語意識を含む「言語生活項目」から成っている。

この調査方法論の特長として、次の3つをあげている（注1）。

- (1) 言語変化に関する世界最長の「実時間研究」です。
- (2) 約20年間隔でランダムサンプリングを実施し、毎回約400名前後の調査対象者に対して基本的に同じ質問項目を4回繰り返した「トレンド調査」です。
- (3) トrend調査に参加した調査対象者を約20年間隔で経年的に追跡し、基本的に同じ質問項目を繰り返した「パネル調査」データを含みます。

一方、日本の方言研究において、1970年代は言語地理学的研究がさかんで、多くの言語地図が作成されている。それから50年以上が経過した現在、その言語地図の再調査をすることで、方言の実時間変化を明らかにするということもなされている。大西拓一郎（国立国語研究所）を中心としたチームは、国立国語研究所編（1981-1985）『日本言語地図』（大蔵省印刷局）や国立国語研究所編（1989-2006）『方言文法全国地図』（大蔵省印刷局）などの質問項目を再度全国で調査し、

新しい日本語地図を作成している（大西 2016）。

本稿も、藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻』（東京大学出版会）の再調査による瀬戸内海域の言語変化研究である。この言語図巻のための調査が行われてから約60年経過しており、60年後の実時間変化となる。本稿の方法や目的等について、次節で述べる。

## 2 本稿の目的・方法

藤原与一（1974）『瀬戸内海言語図巻』（東京大学出版会）について説明する。なお、以降、英語表記の頭文字をとって、「LAS (Linguistic Atlas of Seto inland Sea)」と表記する。

・調査地点：925地点 藤原（1976: 298）には、「全有人島の総集落と沿岸重要地点とを対象とした」とある。

・話者：

老年層 60歳代女性 1名

少年層 女子中学生（12-13歳） 2名

・調査期間：1960年～1965年

・地図：老年層と少年層の地図を上下に並べて対照できるようにしている。

LASの大きな特徴は、それぞれの調査地点で、老年層・少年層の2層の調査を行い、地図が比較対照できるようにしてある点である。これについて、藤原（1972: 207）では、

老・少を比較するのは、ことばの推移する方向性を見ようとするものである。

と述べている。

老年層と少年層を比較して、少年層のことばに変化していくというのは、見かけ上の時間の変化（change in apparent time）として、多くの調査が行われ、主に共通語化という結果が報告されてきた。

老年層 方言

少年層 共通語

であれば、少年層がそのまま共通語を使うことに納得できるかもしれないが、地域で生活する中で地域のことばに変わるかもしれない。また、

老年層 方言

少年層 方言

である場合、そのまま方言を使い続けるということには、共通語化の流れを考えると疑問も感じられよう。

つまり、この結果が一定時間経過後にどうなっているかを実際に再調査してみなければいけないということである。実時間変化研究が求められるのである。松田 (2022: 263) によると、実時間変化研究には、

継続調査            調査のたびごとにサンプリングをくりかえす  
コーホート調査    一定時期に出生した集団を追跡する  
パネル調査        同一対象者をくりかえし調査する

があるとされる。LAS は、老少2層を調査していることから、次の2つの実時間調査が可能である。

(1) LAS から約60年後の調査による言語地図を作成し、地域の言語動態を捉える。

(2) LAS 少年層話者の追跡調査から、言語形成期以後の言語変容を捉える。

(1) は、継続調査にあたり、実時間上の地域言語の変容を知ることである。(2) は、パネル調査で、LAS の見かけ上の時間変化が、少年層話者の実時間変化になっているかどうかを知ることになり、上記のように、言語形成期以後の言語変容を知ることにもなる。

本稿は、(2) に関する調査結果である。少年層話者であった方に再度同じ調査を実施したものである。(1) は、西日本豪雨やコロナ禍のため調査が十分に出来ておらず、言語地図が未完成のため、現時点での報告はむずかしく、調査をすすめているところである。

LAS 追跡調査に関して、継続調査、パネル調査に下記のような報告がある。

広島大学方言研究会 (1981)、灰谷 (1999)、室山・藤原 (1999)、峪口 (2016)、松田・塩川 (2019)

筆者も次の2つを報告している。

友定賢治 (1988) 「同一話者の25年後の言語変化—『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査から—」、『文教国文学』第22号、pp. 72(1)-54(19)

広島県能美島でのパネル調査結果である。

友定賢治 (1999) 「『瀬戸内海言語図巻』の老年層追跡調査報告—岡山県笠岡諸島における—」、室山敏昭・藤原与一編 (1999) 『瀬戸内海圏環境言語学』、武蔵野書院、pp. 125-145

岡山県笠岡諸島での継続調査である。

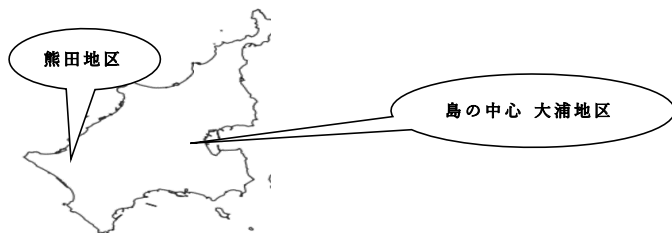
ただ、これら継続調査の報告は、小区域でのものである。LAS と同様の瀬戸内海域全域を対象とした継続調査に峪口 (2016) があるが、調査法はアンケート方

式である。また、パネル調査も特定地点・特定話者のケーススタディーで、パネル調査結果をどう一般化できるかということは解明されていない。本稿も下記地点の調査による考察である。

なお、科研（17H02340、21H00530）では、上記のように瀬戸内海域全域での調査を進めており、そのデータによる言語地図を作成する予定である。

### 3 調査について

- ・地点：愛媛県松山市中島（旧 愛媛県温泉郡中島町）の熊田地区（注2）  
地理：松山市の約10キロ沖合 周囲 約 30 km  
人口：令和3年 2,479人 ※多い時で15,000人程度  
産業：ミカンなどの柑橘類栽培が主な産業  
交通：松山市との間にフェリー・高速船



松山市からのフェリー・高速船が発着する島の中心地が大浦地区で、そこから峠をこえた島の反対側に熊田地区はある。

- ・話者：Aさん、Bさんで、お二人はLAS調査の際に、一緒に話者となったLAS少年層話者である。

	A	B
生年	1948年	1947年
外住歴	4年	7年
両親	中島	中島
配偶者	中島	中島
職業	民宿経営	農業（柑橘栽培）

・調査実施日

LAS 調査 1960年～1965年の間

追跡調査 2019年9月

- ・方法：お2人一緒に、LAS 調査の質問順どおりに、質問文は変更せず、絵カードも LAS のものを使用して LAS 全項目の調査を実施した。ただ、話者の都合で1度に全部実施することは出来ず、2度に分けて行うことになった。

#### 4 分析と考察

本稿では、紙幅の関係もあり、次の2つの調査結果について考察する。

- (1) LAS 少年層と追跡調査の回答が同じもの
- (2) LAS 少年層の回答が共通語の項目の追跡調査結果

なお、LAS 老年層の回答も分析対象に加え、LAS 少年層、LAS 少年層追跡調査と3つの回答語形を比較して考察する。

(1) は、LAS の少年層話者の回答が追跡調査でも同じであるもので、(a) LAS 老年層を含め同一回答で地域に定着している言葉を知る、(b) LAS 老年層との比較からする見かけ上の時間の変化が、そのまま実時間上の言語変化になっているものを明らかにすることになる。

(2) は、LAS 少年層の回答（共通語のみ）が、追跡調査でどうなっているか、実時間変化の実際を明らかにするものである。

もちろん、LAS 少年層の回答が方言で興味深いものは多くある。たとえば、

LAS 老年層	LAS 少年層	LAS 少年層追跡調査
コワイ・シンドイ	コワイ・シンドイ	コワイ

LAS では、老少両方で使っている「シンドイ」が追跡調査では出てこなかった。「シンドイ」は各地で使用が広がっているだけになぜであろうか。「シンドイ」を共通語と思って、回答しなかったのであろうか、LAS 少年層の回答が方言のものの考察は別稿を用意したい。

なお、本追跡調査結果全体は、2022年度の科研集会（2022年9月）で口頭発表している。

#### 4-1 LAS 少年層と追跡調査の回答が同じもの

見かけ上の時間での変化を見るため、LAS 老年層の回答も分析に含めることとする。すると、以下の2つのパターンが見られる。該当するものを1例だけ記入している。

表1 LAS 少年層と追跡調査の回答が同じもののパターン

	LAS 老年層回答	LAS 少年層回答	LAS 追跡調査回答
1	オトンボ	オトンボ	オトンボ
2	カクレコ	カクレンボ	カクレンボ

1は、LAS 老年層・少年層・追跡調査の3つとも同一語形（オトンボ 末っ子）が回答されたものである。このパターンに該当する共通語と方言をいくつか挙げておく。

- 共通語 アサッテ、ニチヨービ、ジシン、ツユ、ウタタネ、マナイタ、カガミ、フーフ（夫婦）、ジャンケン、ウズ（渦）、ツバメ、デンデンムシ、トカゲ、メダカ、マツカサ、ノンダ（飲んだ）、キタノニ（来たのに）、ミセビラカス、ナガイ、ダシテ（出して）
- 方言 オトンボ（末っ子）、オトビ（返礼の品）、コソバカス（くすぐる）コソバイー（くすぐったい）、キツメル（来続ける）、イカス（行かせる）、アルカント（歩かないと）、アゲルケン（あげるから）、ドコゾニ（どこかに）、ホーシコ（つくし）、タマゲル（驚く）、オラブ（大声で叫ぶ）、オギョーギ（正座）、ヨセル（仲間に入れる）、イナキ（稲架）、ホゴ（かご）、サス（天秤棒）、オチョッタ（落ちるところだった）、デンチ（袖なし）、ノラバエ（植物の自生）、シゴトシ（良く働く人）、アリコ（あり）

この地点に定着している共通語と方言である。ここに見られる方言は、中島だけでなく、広く分布する方言や、気づかない方言と言って良いのではないかと。LAS で分布が限定的なのは、イナキ（稲架）だけと言える。藤原与一（1988: 71）には「内海中部小分布」とあり、藤原（1976: 153）には「[[イナキ] [inaki] は、愛媛につよい」とある。稲作方法の変化により、稲架を見る機会がほぼなくなった。そのため、かつての方言がそのまま保存されているのではないかと考える。

2は、LAS 老年層の回答だけが異なるもので、老年層の使う方言がなくなるというのが大半である。例をいくつか挙げる。

LAS 老年層	LAS 少年層	LAS 追跡調査
アマル	オチル	オチル
カワ	イド	イド
カクレコ	カクレンボ	カクレンボ
コンギ	ケンケン	ケンケン
キノボリクサイ	コゲクサイ	コゲクサイ
ワラクロ	NR	NR

LAS 老年層の方言が、LAS 少年層で用いられなくなっており、少年層の言葉がそのまま使われているもので、LAS での見かけ上の時間の変化が、そのまま実時間上の変化となっているものである。「ワラクロ（藁ぐる）」は、LAS 少年層ですでに回答が得られていないが、追跡調査でも同様であった。今、実物を見る機会がなく、習得のチャンスが無かったのであろう。

この2つのパターンに該当する項目数と、全項目数（227項目）（注3）に対する割合は、次のとおりである。

- 1 92項目 40.5%
- 2 27項目 11.8%

もちろん、調査項目によって結果は違う可能性があるのですが、この数値を一般化することはできない。地域等の条件でこの数値がどうなるかは、今後の分析が必要である。本調査地点では、見かけ上の時間での変化が実時間での変化になるのは、それほど多くはないと思われる。それは、言語形成期以後も個人の言語は変化していくことを表している。次は、この点に注目してみたい。

なお、言語形成期とは、15歳頃（LAS 少年層話者の年齢）までの期間で、音韻体系・文法体系・日常の基礎的語彙は、この時期に住んでいる土地のものを習得し確立するとされる。

言語形成期以後の個人の言語変容については、研究が進んでいない。①「言語形成期」以後の個人の言語変容に関するデータがない、②縦断的に個人の言語データを長期間収集することが難しいなどが理由と思われる。

#### 4-2 LAS 少年層の回答が共通語の項目の追跡調査結果

LAS 少年層の回答と追跡調査の回答が異なるものの内、本稿では、LAS 少年層の回答が共通語であるものだけを取り上げる。LAS の全227項目のうち、少年層で共通語語形が回答された項目数は、

- 共通語のみ 79項目
- 共通語と方言の併用 19項目

合計

98項目

となっている。なお、LASの質問項目には、瀬戸内海域各地で用いられる語形をあげ、使用するかしないかを尋ねる項目など、語形以外で回答するものが40項目ほどある。それを除いた項目数は約190項目になるが、98項目は51%ほどになる。

パターンとしては、次表のように5パターンになる。なお、少年層の回答で方言と併用のものは、共通語だけに注目して分類した。「S」は共通語（standard japanese）「D」は方言（dialect）のことである。なお、「D1、D2」とは、異なる方言であることを表している。それぞれ1例ずつ示す。

表2 LAS少年層回答が共通語のもの追跡調査パターン

LAS少年層	LAS追跡調査	LAS老年層	意味すること
S アサッテ	S アサッテ	S アサッテ	地域に定着している共通語
S カボチャ	S カボチャ	D ポーブラ	地域方言の消滅
S テツダイ	D コーロク	D コーロク	地域方言の習得
S ヒトツズツ	D イッコアテ	S ヒトツズツ	他地域方言の習得
S リョーシ	D1 オキノヒト	D2 リョーガタ	他地域方言の習得

「地域方言」というのは、調査地点老年層がLASで回答している方言を表している。

これをまとめると、

(1) 定着している共通語

全年層が共通語のもので、(36)頁で「共通語」として例に挙げている語である。急激にすすむ共通語化を考えれば当然の結果であろう。

(2) 方言の消滅

老年層使用方言が使用されなくなるものであり、(37)頁に、表1「2」の例として挙げている語である。当然の結果とも言える。

(3) 方言の習得・変化

①地域方言の習得

LAS老年層・追跡調査

ナルイミチ

ヤマジ（東南風）

LAS少年層

タイラナミチ

NR



マジ（西南風）	NR
アナジ（北西風）	NR
コーロク（無賃労働奉仕）	テツダイ

少年層話者（中学生）が風向きを意識することはおそらく無いであろう。また無賃労働奉仕といったことも中学生には無縁のことである。地域で生活する中で必要となったり、経験することで、老年層話者が使う言葉を習得したのであろう。

## ②他地域方言への変化

LAS 老年層・少年層	LAS 追跡調査
ニワカアメ	ニワカアメ・ソバエ
ソガイニ	ソガーニ
ナマクラモン	ナマクラ・ノラ
NR	ヨダレヒキ

ということになる。

注目したいのは、「方言の習得・変化」である。LAS 少年層回答にはなく、LAS 追跡調査に見られる方言は、

地域方言の習得	20項目
他地域方言への変化	38項目

で、LAS 全項目（227項目）の25.5%にあたる。この数値も、調査項目によって変わることは考えられるので、一般化は出来ないが、調査全体の4分の1というのは、少なくないと思う。

「他地域方言の習得」の「他地域」とは、どこに分布する方言かを見ると、

・ 島内他地点にある	31項目
3 地点以上	23項目
2 地点以下	8 項目
・ 島内には無い	7 項目

島より東や北の地域に分布する方言

となっており、島内では3地点以上で使われている方言が多い。また、島内にない7項目は、島より東や北に分布している方言で、島より西に分布する方言は見当たらない。

瀬戸内海地域で、近畿が一番の中心地であることはいうまでもない。中心地から大きな交通路沿いに言語が広まることも認められる。つまり、当該地域では東から西に言語（だけではない）が広まるのだとすると、この結果は納得できると言える。また、当然ではあるが、地域の言語変化のありようが個人の言語変化に

も反映されていると言える。

中島は、大きい島である。そのため、島内の他地点で使われている方言を習得することが目立つが、小さい島の場合は、中島と同様に島より東や北の方言を習得し、西の方言は習得しない（少ない）のであろうか。これも今後の課題である。

なお、室山・藤原（1999: 247-248）には、「内海を西から東へ」という見出しがあり、「カライモ、リューキューイモ（さつまいも）」「見ラン（見ない）」が例として挙げられており、西からの広がりが無いということではあるまい。ただ、例に上がっている「見ラン（見ない）」が西から広がったかどうかは慎重に考える必要がある。

## 5 まとめ

本稿では、下記の点を明らかにした。

- (1) LAS 老年層、LAS 少年層、LAS 追跡調査と、ずっと使い続けられている方言が一定数ある。
- (2) LAS 老年層の使う方言は、当然ながら使われなくなっている語がある。
- (3) 言語形成期（LAS 少年層）に共通語を使っている、地域で生活する中で方言を習得するものが一定数ある。
- (4) 習得する方言は、島内で用いられている方言が多いが、島外の方言もある。
- (5) 島外の方言は、島より東、あるいは北に分布する語である。島より西に分布する語は見られなかった。

この5点のうち、(1)～(3)は、当然のことかもしれない。今後は、さまざまな地域のLAS少年層の追跡調査結果を比較し、全調査項目のどれくらいの数値になるのかといったところまで一般化できるかどうかを見ていきたい。(4)(5)は、瀬戸内海地域で、どこまで一般化できるか明らかにしていきたい。いずれも今後の課題である。

### 【注】

- 1 次のURLから引用した。<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tsuruoka/>
- 2 地図は国土地理院白地図をダウンロードしたもの
- 3 LASの全質問項目数は240であるが、質問を控えた項目や、調査時の事情で質問できなかったものなどがあり、227項目となった。

## 【文献】

- 井上史雄（2017）『敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き—』、大修館書店
- 井上史雄・半沢康（2021）「方言衰退の語彙論的過程—庄内浜荻の250年—」、『日本語の研究』17(1)、pp. 1-18
- 江端義夫（1972）「瀬戸内海域言語地図の老年層図と少年層図を見くらべて」、『方言研究年報』第14巻、pp. 41-51
- 大西拓一郎（2016）『新日本言語地図：分布図で見渡す方言の世界』、朝倉書店
- 大西拓一郎（2017）『空間と時間の中の方言』、朝倉書店
- 尾崎善光（2019）「言語変化を把握するための継続調査と個人話者追跡調査との関係に関する研究」、『計量国語学』32(2)、pp. 82-95
- 峪口有香子（2016）「GISによる言語地理学研究：『瀬戸内海言語図巻』との比較を通じて」、徳島大学学位論文
- 高木千恵他（2019）「縦断的インタビューにみる神戸出身女性話者のスピーチスタイル—ことばの経年変化とライフステージ—」、『方言の研究』第5号、pp. 267-293
- 友定賢治（1988）「同一話者の25年後の言語変化—『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査から—」、『文教国文学』第22号、pp. 72(1)-54(19)
- 友定賢治（1989）「瀬戸内海域方言の変容に関する研究」、『国語語彙史の研究』第10巻、和泉書院、pp. 483-502
- 友定賢治（1999）「『瀬戸内海言語図巻』の老年層追跡調査報告—岡山県笠岡諸島における—」、室山敏昭・藤原与一編（1999）『瀬戸内海圏環境言語学』、武蔵野書院、pp. 125-145
- 灰谷謙二（1999）「芸予諸島域方言の動態—大崎上島・下蒲刈島3地点調査にみる基本的変容傾向と方言受容の地域差—」、室山敏昭・藤原与一編（1999）『瀬戸内海圏環境言語学』、武蔵野書院、pp. 146-159
- 広島大学方言研究会編（1981）『大分県姫島方言の研究—第二部—文法・語彙—方言の動態—』、広島大学方言研究会会報 第29号
- 藤原与一編修（1972）『方言研究叢書 第1巻』、三弥井書店
- 藤原与一（1976）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』、東京大学出版会
- 藤原与一（1988）『瀬戸内海方言辞典』、東京堂出版
- 松田謙次郎（2022）「実時間的言語研究—その研究史、方法と問題点—」、『方言の研究』8、pp. 263-264
- 松田美香・塩川菜々美（2019）「大分県東国東郡姫島村方言における56年間の言語変化—同一話者への追跡調査結果から—」、『別府大学紀要』第60号、pp. 15-29
- 室山敏昭・藤原与一編（1999）『瀬戸内海圏環境言語学』、武蔵野書院
- 横山詔一・中村隆・阿部貴人・前田忠彦・米田正人（2014）「成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究」、『計量国語学』29-7、pp. 241-250
- 横山詔一・真田治子（2010）「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」、『日本語の研究』6(2)、pp. 31-45

**【謝辞】**

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金17H02340、21H00530による研究の成果である。

(本学非常勤講師)